

# 読売俳壇

## 矢島 渚男選

戦争は終りましたか地虫出づ

【評】もう戦争は終りましたか、と地虫が出て来たという啓蒙の句である。いま、人間の世界には戦争が好きな虫にも劣る奴がいる。

贈るべく靴のサイズを聞く弥生

【評】入学するお孫さんへの贈り物だろうか。どの位か、離れて住んでいるので分からない。へえ、そうか、随分大きくなったもんだなあ。電話での、そんな幸せなやりとりが浮かぶ。

球児たち雀隠れに球探し

【評】雀隠れは草木の葉が伸びて雀も見えなくなるほどになること。新入部員のボール探しも大変。囁りに目覚める戦さなき国に

妻老いて老いぬ古雛飾りをり

【評】雀隠れは草木の葉が伸びて雀も見えなくなるほどになること。新入部員のボール探しも大変。囁りに目覚める戦さなき国に

ひとの言聞かせ飾りぬ古雛

【評】雀隠れは草木の葉が伸びて雀も見えなくなるほどになること。新入部員のボール探しも大変。囁りに目覚める戦さなき国に

風を読み切干を干す日和かな

【評】雀隠れは草木の葉が伸びて雀も見えなくなるほどになること。新入部員のボール探しも大変。囁りに目覚める戦さなき国に

鉢の梅鉢の外まで散り敷ける

熊谷市 田島 良生

## 高野ムツ才選

路傍にて水雨に濡るる輪島塗

【評】能登半島地震被災の一場面。輪島塗伝承そのものの危機感さえ伝わる。「水雨」は歳時記では雹を指すが、冷たい雨の意としても用いられる。

春になほとほきものあり春の雪

【評】春になつてもなお遠いものは何だろうか。平和だろうか、宮沢賢治が言う世界全体の幸福だろうか。「春の繰り返し」が相乗効果を生む。春の雪止むと言ふより消えにけり

春は来る決して戦の尽きぬこと

【評】はらはらと降ってきたかと思ふと、いつの間にか止んだ春の雪。その様子を消えたかと思えたのが巧み。まるで天使の降臨のようだ。今咲いた花弁のやう蝶生まる

洗ふことも楽しみにして春の泥

【評】はらはらと降ってきたかと思ふと、いつの間にか止んだ春の雪。その様子を消えたかと思えたのが巧み。まるで天使の降臨のようだ。今咲いた花弁のやう蝶生まる

斎場を駆け回る子や春の雪

【評】はらはらと降ってきたかと思ふと、いつの間にか止んだ春の雪。その様子を消えたかと思えたのが巧み。まるで天使の降臨のようだ。今咲いた花弁のやう蝶生まる

春は来る決して戦の尽きぬこと

【評】はらはらと降ってきたかと思ふと、いつの間にか止んだ春の雪。その様子を消えたかと思えたのが巧み。まるで天使の降臨のようだ。今咲いた花弁のやう蝶生まる

梅が香の抜けゆく空の青さかな

大月市 米山 明博

## 正木ゆう子選

エレベーター乗るにも笑ふ新年会

【評】久しぶりにみんな集まったのが嬉しくて、何でもないことにも笑いが湧く。この集団はおそろしく女性。多分あまり若くはなく、しかも声が大きい。元気な句会の仲間かも。制服の魔法の解けて卒業す

宇陀市 泉尾 武則

【評】高校からの卒業。こちらも女子を想像。今時の制服はお洒落で、実に可憐である。守られた魔法の日々が終わり、人生へと踏み出す春。図書館のコピー十円なき遅日

相模原市 大谷千恵子

【評】図書館だからいいかと、お財布を持たずに外出。コピーの欲しい頁があったが、そのための十円が無い。たった十円でも無いものは無い。壇上へ卒業袴蹴り上げて

越谷市 小林ゆきお

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

川崎市 稲田 寛

【評】冬の間、穴のなかですと過ごしていた蟻が、春になって、久しぶりに地上へと出ようとしている。「真新しき光」とは、まさにその時、感知した光である。

東京都 望月 清彦

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

久喜市 小玉 雄平

## 小澤 實選

蟻穴を出づや真新しき光

【評】冬の間、穴のなかですと過ごしていた蟻が、春になって、久しぶりに地上へと出ようとしている。「真新しき光」とは、まさにその時、感知した光である。

岡山市 橋本 幹夫

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

松戸市 早坂 哲夫

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

川口市 高橋まさお

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

香芝市 山本 合一

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

東京都 佐藤 順子

【評】夫夫婦ふたりで小さな舟に乗って、若布刈をしている。鱧船をあやつるのは妻にまかせて、夫は若布刈に専念するのである。

甲府市 村田 一広

## 俳句あれこれ 佐藤文香 (俳人)

## 逢って話して ①

三月、光は春なのに寒い日には、八春風と思えば嬉しあ寒し 池田澄子Vを思い出す。  
先日、杉並区役所に戸籍謄本を取りに行った。近くにお住まいの澄子さんに「今、ご自宅にいらしたりますか？」とメッセージを送った。すぐに「居ますよ」と返ってきた。お昼前だったのでパンを買って行ったが、澄子さんは朝ご飯を食べたところのこと、お茶を淹れてもらい、私ひとりパンを食べた。お庭の梅に自白が来たので写真に撮った。梅に驚いなくて、ねえ、笑った。澄子さんが少女時代に愛読したという中原中也全集も見せてもらった。表紙の青いヨットと「むなしさ」という詩の「な」の活字がまがっているのを可愛く感じた。  
へいものように逢って桜を寝めようよ 澄子V。こころやって会えるなら、本籍を移さなくてもいいか。本日三月二十五日は澄子さんのお誕生日。おめでとついでいます、って送ろう。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭